

森村 誠一 - 平和への想い -

本日、前期前半の最終日です。皆さんはこの4ヶ月間、充実した学校生活を送ってきました。そのことを何よりもうれしく思っています。

（オンライン集会。生徒はスライドを見ながら話を聞く）

ここでは、熊谷出身の大作家・森村誠一さんを取り上げます。森村さんの「平和への想い」を皆さんにも感じ取って欲しいと考えています。森村さんの代表作は「人間の証明」「野性の証明」などの小説作品です。ただ、特徴的なのは作品が小説にとどまらず、映画化やドラマ化をされた点です。大きな社会現象にもなりました。その後も、どんどんとヒット作を生み出し、活躍を続けました。しかし、残念ながら、1年前の令和5年7月24日に御逝去されました。90歳でした。今年は一周年にあたります。

森村さんが、私たちのまち。熊谷市に生をうけたのは昭和8年のことです。熊谷駅からほど近い弁天町というところでした。現在では地名はありません。17号沿いにお家があったそうです。写真は熊谷東国民学校（現 東小）の卒業写真です。卒業したら、富士見中に入学・・・と思いましたが、新制中学校の富士見中が誕生したのは、森村少年が卒業した2年後のことでした。森村少年は旧制の中等教育学校に進学します。その年の8月、終戦を目前とした熊谷に、アメリカ軍が空爆を仕掛けてきたのです。焼夷弾を落とされたのは、熊谷駅周辺の市街地、まさに富士見中の学区です。森村さんは、その時のことを次のように振り返ります。「昭和20年8月14日の夜、私はいつものように身の回りの品を詰めたリュックサックを枕元に置いて寝ていた。突然、父親に枕を蹴飛ばされて起き上がると、周辺が真昼のように明るくなっていた。一家五人、かたまって近くの星川という小川に避難した。火から水を連想したのである。」（自叙伝「遠い昨日、近い昔」）「火を避けて、この星川へ逃げ込んだ人達は、ほとんど全員が、翌朝死体となって発見された。星川の流れが死体で埋まっていた凄惨な光景は、今でも忘れられない。」（市民のつづる 熊谷戦災の記録）森村さんは、「いま自分が見て体験していることを、いつの日か書きたい」という衝動に駆られたそうです。作家としての原体験だとも回想しています。「市民のつづる 熊谷戦災の記録」には熊谷西国民学校（現 西小）が熊谷大空襲で爆弾を落とされ、ほぼ全焼する様子を後に描いた絵画が掲載されています。この時、焼け残った8本のけやきは、後に現在の中央公園にあった富士見中学校の校庭に移植されました。今でも中央公園にけやきの木は残っています。

現在、桜木小の裏にある熊谷市立熊谷図書館（3階）の郷土資料展示室では「追悼・森村誠一の証明展」が開催されています。森村さんの遺品や書き残した数多くの作品などが展示されています。また、郷土資料展示室内には熊谷大空襲に関する貴重な展示もあります。私も先日訪れました。時間が過ぎるのがあつという間でした。夏休み中にぜひ。

森村さんは自叙伝「遠い昨日、近い昔」の中で「戦争は人間を非人間化する」「二度と戦争起こすまじの誓い」という言葉を使い、平和への想いを語っています。ご自身が経験した熊谷大空襲の経験は、90年の生涯に大きな影響を与えたことは間違いありません。

戦争は遠い昔のことではありません。写真には、ウクライナの学校に一人たたずむ少女が写っています。私たちは、今この時にも、世界の各地で起こっていることに、しっかり目を向ける必要があります。今年75回目を迎える「星川とうろう流し」に本校美術部参加します。「平和」が当たり前ではないことに、改めて、想いを巡らせたいものです。

明日からは、夏休みです。有意義な夏休みを過ごして下さい。